

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 9 月 24 日現在

機関番号：32682

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520370

研究課題名(和文) ブコヴィーナのドイツ・ユダヤ文学と初期パウル・ツェランの総合研究

研究課題名(英文) Paul Celan und deutschsprachige Literatur aus Bukowina

研究代表者

関口 裕昭 (Sekiguchi, Hiroaki)

明治大学・情報コミュニケーション学部・教授

研究者番号：50295581

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：パウル・ツェランの特に初期の作品を、彼の故郷であるブコヴィーナ出身の他の詩人たちと比較し、文学的伝統の受容や交友関係から、その本質に迫る研究である。自然形象の扱い方、ユダヤ性(Judentum)およびホロコースト体験との取り組み、文学サークルでの影響関係などの視点から、ツェランがいかに自然抒情詩の伝統から抜け出して独自の詩的言語を構築していったかを明らかにした。同時にツェランの影に忘れ去られていた詩人たちの再評価も試みた。ブコヴィーナ文学全体の紹介と考察にまでは至らなかったが、ユダヤ性とドイツ性の相克から、彼の詩的言語と造形芸術の関わりを、キーファーを手がかりに解明することができた。

研究成果の概要(英文)：Diese Studie versucht, die fruehen Werke von Paul Celan, vergleichend mit den anderen Dichtern aus der Bukowina, seine Rezeption der literarischen Erbschaft und den Bildungsprozess seiner poetischen Sprache zu veranschaulichen. Der Schwerpunkt der Betrachtung dabei ist, die Anwendung der Naturbilder, seine Beschaeftigung mit dem Judentum und dem Horocaust-Erlebnis. Dadurch wurden die vergessenen Dichter aus der Bukowina neu geschaezt und darueber hinaus wurde Celans Beziehung mit der bildenden Kunst aus einem neuen Kontext betrachtet.

研究分野：ヨーロッパ文学

キーワード：パウル・ツェラン ブコヴィーナ アンゼルム・キーファー ユダヤ 詩と造形芸術 ホロコースト
集団的記憶 ナチス

1. 研究開始当初の背景

これまでハインリヒ・ハイネ以降のユダヤ・ドイツ文学、とりわけ 20 世紀を代表するヨーロッパの詩人パウル・ツェランを研究してきた。その成果は 3 冊の研究書としてまとめられた。『パウル・ツェランへの旅』(2007 年、郁文堂)『評伝パウル・ツェラン』(2008 年、慶應義塾大学出版会)、『パウル・ツェランとユダヤの傷 間テクスト性 研究』(2011 年、慶應義塾大学出版会)。

これらの研究では十分に解明できなかったブコヴィーナの初期のツェランを、同時代のユダヤ系ドイツ語詩人と比較考察するのが本研究の目的であった。その主な詩人の名前を挙げれば、アルフレート・マルグル＝シュペルバー、モーゼス・ローゼンクランツ、ローゼ・アウスレンダー、アルフレート・キットナー、イマヌエル・ヴァイスグラス、アルフレート・ゴングラがあげられる。彼らの大部分は、今日忘れ去られてしまっているが、文学史的にみて重要な価値を持っている。

ツェランと彼らを、伝統との距離の取り方(特に自然抒情詩と表現主義、シュルレアリスムとの関わり)詩的形象の扱い方、文学サークルなどにおける交友関係、ホロコースト体験などの伝記的背景などから総合的に研究するのが当初の目的であった。

この研究はいくつかの論文と口頭発表に結実したが、一冊の体系的な研究書にまとめるには至らなかった。

それに代わって、アンゼルス・キーファーという現代ドイツ美術を代表する画家・彫刻家がツェランをいかに受容したかに研究の比重が移行することになった。もちろんそのなかで、初期ツェランの研究も続けられた。ブコヴィーナに関する研究書はぜひ近い将来、刊行したいと思う。

2. 研究の目的

アウシュヴィッツの生き残りであるパウル・ツェランにとって、ユダヤ人という出自はきわめて重要な意味を持つ。しかし彼は生涯ドイツ語でのみ詩作した。このユダヤ性とドイツ性の相克は極めて重要で、本研究でも大きなテーマとなる。

初期のパウル・ツェランとブコヴィーナのドイツ・ユダヤ文学を考察するときもこれは無視できない。なぜなら、ブコヴィーナ出身のドイツ語で書いたユダヤ人詩人には、特に第二次世界大戦前の世代では、ユダヤ人であることとドイツ人であることが矛盾しない、それどころかドイツ語で書いているので自分はドイツ人であると考えた詩人もいたのである。

一方、ツェランと造形芸術の関係もまた重要である。彼は 1948 年ウィーンに滞在中、シュルレアリスムの画家エドガー・イエネを懇意になり、試論「エドガー・イエネの夢の夢」という詩論を書き、1952 年フランス入

の版画家ジゼル・レトランジュと結婚してからは、詩と造形芸術御関係をより深く模索してゆく。ゴッホ、レンブラントなどにインスピレーションを得た詩を彼は書いている。

このような流れの中で、アンゼルス・キーファー(1945～)というドイツ最大の画家が研究の視野に入ってきた。キーファーは、ツェランの詩、とくに「死のフーガ」から大きな影響を受け、多くの作品を制作している。

こうしてツェランとキーファーをたがいの鏡に映すように往復しながら比較考察し、ユダヤとドイツの相克の問題を歴史的、思想的に考察することが本研究の中で大きくクローズアップされることになった。

ただし初期ツェランの研究がなおざりにされたわけでは決してなく、キーファーとの関わりから新たに光を当てることになった。具体的には、チェルノヴィッツで読んだ『ニーベルンゲンの歌』の影響、イアソン神話の受容、シダ(植物)の形象の扱われ方で：を詳細に考察することができた。

3. 研究の方法

ツェランの詩のテキスト、特に初期の作品を精読し、ブコヴィーナの詩人たちのテキストも体系的に読み進める。ブコヴィーナの詩人のテキストはランボー社から、シリーズ化されて(「ブコヴィーナ文学叢書」)復刊されている。現在 80 冊ほど出ているこの叢書を精読する。

これと並行して、パリのエリック・ツェラン氏らとも連絡を取りながら、ツェランと造形芸術との関係の研究し、またその紹介に努める。アンゼルス・キーファーの造形芸術作品をドイツ各地に見にゆき、カタログや研究文献を収集し、精読する。

ドイツ・オーストリアの大学や研究所、美術館・博物館と連絡を取り、あるいは必要に応じて赴き、資料の収集にあたり、研究上のアドヴァイスを受ける。研究機関としてはウィーン大学、オーストリア文学協会、マールバッハ・ドイツ文学資料館などを利用した

4. 研究成果

以下に挙げた 8 本の論文、7 本の口頭発表、そしてそれらの成果をまとめた 1 冊の研究書をまとめることができた(研究書は印刷中で 8 月刊行)。

この研究書(『翼ある夜 ツェランとキーファー』)は 10 章からなり、ツェランとキーファーのみならず、ユダヤ性とドイツ性の相克を様々な視点(形象)から徹底的に考察している。すなわち、テーマとしては「水晶」「白鳥」「ライン河」「映画」「飛行機」「錬金術」「書物」を扱う。例えばツェランと映画

や錬金術との本格的な研究は本書が初めてである。

また考察の対象となる主な作家・詩人として、ツェランとキーファー以外に、インゲボルク・バツハマン、アーダルベルト・シュティフター、ハインリヒ・ハイネ、リヒャルト・ヴァーグナー、ポール・オースター、エドモン・ジャベスあげられる。

本研究の遂行の中で特筆すべき成果として、2013年9月14日～12月1日、神奈川県立近代美術館・鎌倉別館にて、日本で初めてツェランの妻で版画家のジゼル・ツェラン＝レトランジュの作品をまとめたかたちで紹介し、カタログを作成した。展示した作品の半分は私の個人のコレクションから提供した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)以下すべて関口裕昭の単著

[雑誌論文](計 8 件)

「アンゼルク・キーファーとパウル・ツェラン 1」(『みすず』no.613, 2013年3月号)

「アンゼルク・キーファーとパウル・ツェラン 2」(『みすず』no.614, 2013年4月号)

「アンゼルク・キーファーとパウル・ツェラン 3 - インゲボルク・バツハマンという「境界」を越えて」(『みすず』no.615, 2013年5月号)

「アンゼルク・キーファーとパウル・ツェラン 4 - インゲボルク・バツハマンのユートピアの彼方に」(『みすず』no.616, 2013年6月号)

「《息の結晶》—ジゼル・ツェラン＝レトランジュの銅版画」(『展覧会カタログ ジゼル・ツェラン＝レトランジュ』神奈川県立近代美術館、2013年9月)

「ジゼル・ツェラン＝レトランジュの銅版画の世界」(『みすず』no.620, 2013年10月)

「ブコヴィーナにおける詩的風土の形成—マルグル＝シュペルバー、アウスレンダー、ツェラン」(『オーストリア文学』第30号、2014年3月)

「変転する水晶—ツェラン、シュティフター、キーファー」(『明治大学教養論叢』通巻507号、2015年3月)

[学会発表](計 7 件)

「アンゼルク・キーファー 廃墟に舞い降りた天使」(「多木浩二継承シンポジウム 子供が子供であった時」司会・今福龍太、メキシコ大使館、2012年9月28日)

「多文化地域ブコヴィーナと初期パウル・ツェラン」(シンポジウム「世界文学におけるオムニフォン」明治大学和泉図書館ホール、2012年12月8日～9日)

「ハイネと『ハガダー』 ユーデントウム理解の手がかりとして」(ハイネ逍遥の会、2013年2月23日、名古屋国際会館)

「ブコヴィーナのドイツ・ユダヤ文学」(全明治ドイツ文学会、2013年10月26日、明治大学)

「砂、石、書物 ツェラン、ジャベス、オースターにおけるユダヤ詩的想像力の系譜」(日本比較文学学会全国大会、成城大学、2014年6月15日)

「ライン河のイメージの変容 ハイネからキーファー、ツェランへ」(ハイネ逍遥の会、名古屋国際会館、2014年6月28日)

「灰と鉛の想像力 アンゼルク・キーファーにおける錬金術とツェラン」(日本独文学会秋季研究発表会、2014年10月12日)

[図書](計 2 件)

(単著)『翼ある夜 ツェランとキーファー』(みすず書房、約360頁、2015年8月刊行予定)

(共著)『スイスを知るための60章』(スイス文学研究会編、明石書店、2014年5月31日刊行)総387頁。(「山・川・湖」60-65頁、「エンガディンの自然と芸術家」66-70頁、「ジュネーヴ」126-130頁、「フュースリ、ホードラー、セガンティーニ」181-185頁、「ジャン＝ジャック・ルソー」271-275頁の5章を担当)

以上のほかに、書評や展覧会のレビューも執筆した。

[産業財産権]

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：

権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者 関口裕昭
(SEKIGUCHI, Hiroaki)
明治大学・情報コミュニケーション学部・教授

研究者番号：50295581

(2)研究分担者
()

研究者番号：

(3)連携研究者
()

研究者番号：